

# ガンダーラ仏教における廻向儀礼

小 谷 仲 男

## I アフガニスタン、ハッダ出土の仏典写本

1994年、ロンドンの古物市場にアフガニスタンのハッダから出土したと伝えられる仏教経典の古写本が売りに出された。幸いこれはある篤志家の好意によって大英図書館に収蔵された。写本は白樺樹皮 (birch bark) に葦のペンで墨書された29点の巻物断片からなっていた。経文はガンダーラ語カロシュティ文字で書かれている。経巻の大きさは破損が激しく一様ではないが、左右幅は平均14.5cm、広げたときの長さは、最大のもので213.4cm、ついで1mを越えるものが4点、そのほかは数十センチの長さであった。残存巻物の長さを合計してみると、約16.5mになる。文字は巻物の右端から左へむかって水平に書かれる。約1cm幅に一行、一行30字前後である。かつて中央アジアのホータンからガンダーラ語カロシュティ文字の写本『法句経 (ダルマパダ)』が発見されたことがある (1892年)。出土の状況は不明であるが、保存状態がよく、幅20cm、長さ5mの白樺樹皮の巻物 (一部裏面にも写経が及ぶ) に経文の大半が収められていた。ホータン出土のガンダーラ語『ダルマパダ』は長い間孤立した存在であったが、今回のガンダーラ語写本の発見はそれが孤立的存在でないことを証明し、しかもガンダーラ本土で出土したところに大きな意義がある。ハッダ出土の写本はホータン出土の『ダルマパダ』写本と違って、複数の経典を含むことが判明している。

大英図書館の所蔵となった伝ハッダ出土の写本はシアトルのワシントン大学サロモン教授 (サンスクリット学) の率いるプロジェクト・チームによって調査研究が行われることになった。1996年にワシントン大学にEarly Buddhist Manuscript Project (略号EBMP) が設置され、現在もそこで解読作業が続けられている。まず、サロモン教授が写本全体に対する概要報告を出版した。

Richard Salomon, *Ancient Buddhist Manuscripts from Gandhāra : The British Library Kharoṣṭhī Fragments*. The British Library and University of Washington Press 1999.

大英図書館に収蔵されたのは、写本29点だけではなかった。写本を収納していた壺形土器 (Pot D) とそれとほぼ同種の壺形土器で、やはり表面に墨書文字の書かれたもの4個 (Pot A, B, C, E)、墨書文字のある土器片26点があり、サロモン教授はそれらを含め、豊富な

カラー図版とともに研究の途中経過とその成果を述べている。

ついでその翌年、正式報告書の第一冊が刊行された。

Richard Salomon, *A Gāndhāri Version of the Rhinoceros Sūtra : British Library Kharoṣṭhī Fragment 5B*. University of Washington Press 2000.

これはパーリ語經典の sutta-nipāta (経集) の蛇品第3経「犀角経」に対応する經典である。パーリ語經典が44の偈句からなっているのに対し、ガンダーラ語ヴァージョンは40の偈句からなり、その配列も異なる。偈句の最後はみな同じ文句、*eko care kharga visanagapo* (犀角のごとく、一人歩め) で終わる。孤独に修行する出家者に対する忠告、励ましの文章である。これに対応する漢訳經典は現存しない。

報告書第二冊目が最近出版された。

Mark Allon, *Three Gāndhāri Ekottarikāgama-type Sūtras: British Library Kharoṣṭhī Fragments 12 and 14*. University of Washington Press 2001.

さきの「犀角経」が写本断片 No.5B であったが、これは写本断片 No.12 と 14 についての解説である。No.12 は幅 16.5cm、長さ 57cm、No.14 は幅 14.5cm、長さ 27.7cm あり、それぞれ 55 行、24 行の経文が書かれている。それらは一連の經典であり、短い 3 経から構成される。そのうちの第 1 経の「ドーナ *Dhona* 経」(仮題) については対応經典がはっきりしている。パーリ語經典の『増支部經典』第四集 (*Anguttara-nikāya, catukka-nipāta*) に含まれる経に対応する。サンスクリット、チベット經典には対応するものがなく、漢訳經典に三通りの対応經典が見出される。『増一阿含経』巻 31、『雜阿含経』巻 4、『別訳雜阿含経』巻 13 に含まれる「ドーナ (豆磨) 経」である。従って報告者は写本名を表題のように *Ekottarikāgama-type Sūtras* (『増一阿含経』タイプの經典) としている。しかしこの写本が膨大な量を持つ『増一阿含経』(51 巻) に相当するガンダーラ語版經典の一部なのか、それとも独立經典として存在した「第四集経 (*catukka-nipāta*)」の写本なのか、その判断はむずかしい。報告者は独立經典の写経であったと推定している (Allon 2001: 24)。

以上のような解説作業の過程からサロモン教授は、仮説としながらもいくつかの重大な結論を提示する。

#### 1) ガンダーラ語大藏経の存在

初期の漢訳經典の中にサンスクリット以外のインド方言からの音訳が多いこと、また前述のようにホータンからカロシュティ文字ガンダーラ語の『ダルマパダ』写本が発見されたことなどから、ガンダーラ語經典の存在が予想されていた (Gāndhāri canon hypothesis)。それが今回、大量のガンダーラ語写本の出現でゆるぎなきものになったという (Salomon 1999: 58)。報告書第二冊の中で明らかにされたことであるが、伝ハッダ出土写本は大英図書館に収蔵されたのがすべてではなく、それに匹敵する量の写本が個人コレクションに帰っていたことが知ら

れた (Senior Collection)。プロジェクト・チームの予備的な調査によると、それは24点の白樺樹皮の巻物写本で、内容は *Samyuktāgama* (相应部經典) に対応するガンダーラ語版經典という (Allon 2001: xiv)。

さらに最近ハッダ以外から別のカロシュティ文字ガンダーラ語写本が出現した。1995年、ロンドンの古物市場に今度はアフガニスタン、伝バーミアン出土という大量の仏教經典の古写本が売りに出た。バーミアン写本はハッダ写本と違って、少し年代が下がり、白樺樹皮のほか貝葉 (palm leaf) に書かれたものが多いのが特色で、大部分はブラーフミー文字サンスクリット仏典写本である。写本文字の書体からクシャン時代のブラーフミー文字 (3世紀)、グプタ時代ブラーフミー文字の北東型 (3 - 4世紀) と西北型 (5 - 6世紀)、ギルギット・バーミアンの第1型 (6 - 7世紀) と第2型 (7 - 8世紀) の5期に分類することができる。この伝バーミアン出土写本の大部分はノルウェーの実業家スコイエン氏のコレクションに帰した。断片を含めて1万点以上の数量になるという。そのなかに少量ながらカロシュティ文字ガンダーラ語写本が存在する (すべて貝葉, 200点)。スコイエン・コレクションについてはオスロ大学のイエンス・ブロールヴィック (Jens Braarvig) 教授、仏教大学松田和信教授らの4人が解説、研究に取り組んでおり、すでに報告書第1冊が出版された。

Jens Braarvig ed., *Manuscripts in the Schoyen Collection I, Buddhist Manuscripts*. Vol. I, Oslo 2000.

上記の報告書のなかのカロシュティ文字ガンダーラ語写本については、特別にサロモン教授らが解説を担当し、ガンダーラ語小乗涅槃經 *Mahāparinirvānasūtra* の存在を明らかにしている。この写本年代はハッダ写本より幾分新しく、2 - 3世紀頃とする (上記書, pp. 247-273)。

このようにカロシュティ文字ガンダーラ語經典はこの数年間に量、種類ともに増大した。やがて、ガンダーラ仏教の未知の世界が明らかにされてくるだろう。

## 2) ハッダ写本の年代

サロモン教授は伝ハッダ出土の写本年代を1世紀の前半、とくに A.D. 10 - 30と推定する。しかし写本を収めていた壺形土器 (Pot D)、およびそれと同時に大英図書館に収蔵された壺形土器 (Pot A, B, C, E) を鑑定したオルチン (R. Allchin) 教授は他の遺跡から出土した土器資料と比較して、土器自体はクシャン時代初期から中期にかけてのもの (2世紀中) とした (Salomon 1999: 183-87)。また写本のカロシュティ文字も、従来クシャン時代以降の書体とされてきたものである。それにもかかわらずサロモン教授はなぜ写本年代を上のように古く見ようとするのか。アヴァダーナ Avadānas (譬喻經) として記された写本中に、西暦1世紀前半に活動したいわゆるサカ・パルチア人の支配者、Jihonika や Aśpavarman の名前が挙げられていること、さらに壺形土器 (Pot A) の墨書のなかに「Suhasoma の妻 Vasavadata の寄進」とあり、その Vasavadata (Vāsavadattā) の名前がアブラチャ (Apraca) 国インドラ

ヴァルマン Indravarman 王の奉納銘文（アゼス紀元63年在銘 = A.D. 6年）に国王の姉妹として登場することから、写本もそれに近い年代と推定したのである（Salomon 1999: 152-55）。遺物の様式から判断する年代と墨書中の歴史上人物から推定する年代とのあいだに100年ほどのずれが出る。しかし写本の正確な出土状況が不明な現状では、これ以上議論を深めようとしても徒勞に終わるかもしれない。今回のアフガニスタンの内戦は多くの文化財を破壊するとともに、他方で地下に埋もれていた貴重な歴史考古資料を明るみに出した。それらはみな驚嘆に値するものであるが、史料価値の観点からすれば、その発見に取り返しのつかない損失が伴っていることを忘れてはならない。

### 3) ハッダ出土写本の「法蔵部」伝承

ハッダの經典写本を収めていた壺形土器（Pot D）の表面には、「四方僧伽（*saghami caudiśami*）において、法蔵部（Dharmaguputakas）の所領として寄進」と墨書されていた。また同時に大英図書館に収蔵された土器片26点のうち、4点（Nos.8, 11, 17, 26）にも「法蔵部への寄進」の文字が見られた。そのほかサロモン教授は大英図書館以外に個人コレクションに帰した伝ハッダ出土の壺形土器、土器片を調査し、さらに6点に「法蔵部（への寄進）」の文字を読み取った。サロモン教授はハッダ出土の写本經典の種類、内容を考慮しながら、それらが小乗仏教の特定の部派、つまり法蔵部（Dharmaguputakas）が保持した經典類であると結論した。サロモン教授はその推論を拡大し、ガンダーラにおいて最初は法蔵部がインド・スキタイ人支配層の保護を受けて優勢であったが、やがてクシャン人が北方からガンダーラへ侵入してくると、ライバルの説一切有部（Sarvāstivādins）がかれらの支持を取り付けて優勢となり、法蔵部派は次第にガンダーラから衰退していったとする（Salomon 1999: 167-171）。以上の結論ははなはだ刺激的で、重大な発言である。しかし問題点もいくつか存在する。伝ハッダ出土の壺形土器のうち、他の2個（Pot B, C）には「この水壺は四方僧伽において、説一切有部（Sarvāstivādins）の諸師の所領として寄進」と墨書されていた。また土器片のひとつには「化地部（Mahīśāsakas）」の文字が記されており、当時のガンダーラ仏教は必ずしも法蔵部一辺倒ではなかった。また法蔵部と説一切有部派の主張の対立がどれほど大きく、それが伽藍配置などにどのように反映しているのか、解明すべきところが多い。先の写本年代の問題と同様に、出土状況の不明な考古資料からだけで判断するには限界を感じる。

私はこれまでの研究の中で「ガンダーラ美術はクシャン王朝の芸術、宗教活動の所産であった」と主張してきた。私たち日本隊がガンダーラでいくつかの仏教寺院址を発掘し、建築遺構とともに多くのガンダーラ彫刻、クシャン貨幣、カロシュティ碑文を収集した。それらの中に確実にクシャン以前にさかのぼる遺物を見出しえなかったからである。しかしながらカロシュティ文字ガンダーラ語によるアショカ碑文がシャハバズガリ村に現存するように、ガンダーラへの仏教移入は早くから始まっており、かりにクシャン時代になってガンダーラ仏教およびガ

ンダーラ美術が急速に成長したとしても、その母体となるガンダーラ仏教の下地は存在したに違いなく、私自身もその確実な手がかりを模索している最中である。今回サロモン教授らの伝ハッダ出土「世界最古の仏典写本」についての研究成果を読み、その他イタリア隊の調査報告書などを参照し<sup>1)</sup>、多くの有益な示唆を得ているが、クシャン朝以前のガンダーラ仏教についてはなお確実な歴史考古学資料を入手できないというのが、現在の私の実感である。

## II 壺形土器 Pot A の寄進文

ハッダ出土の壺形土器 Pot A の墨書寄進文は壺の肩部に水平 2 行に記される (Fig 1)。サロモン教授の解説に従えば、墨書の転写と翻訳は次のとおりである (Salomon 1999: 191-199)。

(上段) *bhadamta [ca]t[ula]sa saghapriya sadhamviharisa pratigraha*

サガプリア Saghapriya の弟子のチャトゥラ Catula(?) 師の所領として

下段の墨書は長文である。まず Salomon 教授の転写を示すと、次のとおりである。

(下段)

*[a]yam pānaya ghadedeyam dharme va[sa]vadatae susomabharyae atmanasa  
arogadaksinae svamiasa suhasomasa sammepratyaśae madapi [t]rina  
sammepratya + + + + + sammepratyaśae mitrañatisa lohitana  
sammepratya[śa]e bhava[tu]*

Pot A には一部破損があり (Salomon 1999: Pl. 23, Figs. 14, 19-20)、墨書も欠落部分がある (+ 印)。サロモン教授はそれを *-śae sarvasatvana* (all beings 一切衆生) と復元して翻訳した。しかし私の手元には大英図書館に収蔵される以前、まだ大きく破損していない状態の水壺 Pot A の写真があり<sup>2)</sup>、欠落の墨書も読み取ることができる (Fig. 2)。私はそれを *-śae putradhitarana* (putra=son 息子, dhitarā=daughters 娘) と読んだ。今サロモン教授の翻訳をそのように一部訂正して翻訳全文を示すと、次のとおりとなる。

この水壺は自らの無病賦与を願ってスハソマ Su (ha) soma の妻、ヴァサヴァダタ Vasavadata が謹んで行った寄進物である。この功德が夫スハソマに適正にふり向けられ、またかの女の父母にも適正にふり向けられ、かの女の息子、娘にも適正にふり向けられ、かの女の友人および親戚、血縁にも適正にふり向けられんことを。

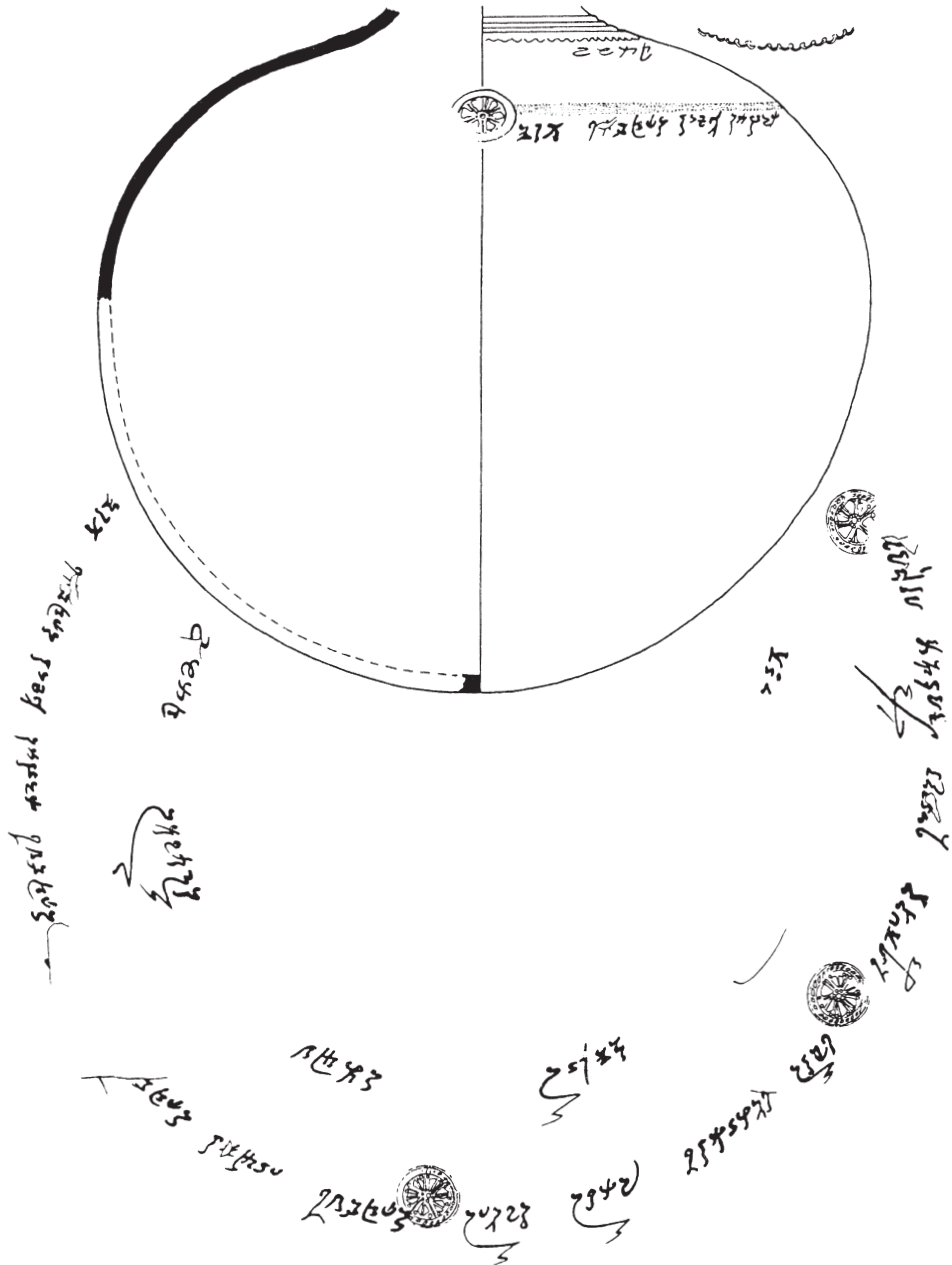


Fig. 1 壺型土器 Pot A の測図と墨書名 Drawing of Pot A with inscriptions (Salomon 1999 : fig. 14)



Fig. 2 Pot Aの墨書銘 (欠損部分) Details of the inscriptions of Pot A with missing letters apparent

カロシュティ文字ガンダーラ語における娘 *dhitarā* (Skt. *Duhitṛ*) の用例は少なく、現在のところマトゥラー出土のライオン柱頭 (大英博物館蔵) の刻文に二度、そしてタキシラ、カラワーン寺院址出土の銅版銘文 (アゼス紀元134年在銘 = A.D.77) に一度見えるだけである。(Konow 1929: 48, pl.XV, A 3, 8; Marshall 1951: 327, pl.80a)。息子・娘と連記した例は今のところ発見されていない。サロモン教授は *putra-dhitarāna* の私の解読に賛意を示され、文法的には属格複数形であろう (the expected genitive plural) と教示された。

上記の寄進文の内容は、ヴァサヴァダタという女性が壺形土器 (高さ37.6 cm, 口縁部を欠く) をサガプリアの弟子であるチャトゥラ (?) という師僧を受取人として仏教僧院に寄進し、その善き行為によって自分自身の無病の賦与を願い、あわせてその功德の一部が夫のスハソマ、両親、子供たち、そして友人、親戚へふり向けられるように願ったものである。今から約2000年前の墨書のなかに、施主のやさしい気持ちが率直に伝わってきて、ほほえましい。ただ、たった一個の水壺 (*pāni* 水 + *ghade* 壺) の寄進にしては欲張りすぎではないかという素朴な疑問もわく。しかし私たちの手に残されたのはこの水壺だけであり、水壺を含んだかの女のもっと多くの僧院への寄進行為が背景にあったのかもしれない。私たちが仏教寺院址を発掘すると多くの土器を発見するが、このような寄進文が付けられた土器を発見するのは、ごくまれであるからである。

後節において詳しく検討するつもりであるが、この水壺は最終的に聖僧の納骨容器として使用され、寺院仏塔の周囲をとりまく小塔の一つに安置されていたものと思える。今回のハッダ出土品で、大英図書館以外に収蔵された遺品の中に、火葬された人骨を収めた状態のままの壺型土器があった (Salomon 1999: 80, Pls.17-20, The Ashmolean Museum, Oxford 所蔵)。土器の胴部には墨書で老僧と若い比丘が向かい合うように、ふたりの上半身が描かれており、その老僧がその壺形土器 (納骨容器) に納められた人物であろうと思われる。したがって、Pot A とともに大英図書館に収蔵された Pot B, C, E も同様に納骨器であった可能性が高い。

また先に紹介した Pot D には仏典写本の巻物が収められていた。水壺が仏典写本の保管容器に使用されていたとも考えられるが、サロモン教授が推測するように、使い古された経巻が新しく書写されたあと、それらが聖僧の遺骨のごとく水壺の中に収納されて、小塔のなかに丁寧に埋葬されたのであろう (Salomon 1999: 71-81)。これらの水壺が再使用されたものではなく、はじめから納骨器あるいは経典埋葬用に寄進されたとすれば、Pot A の寄進者のヴァサヴァダタは在家の仏教信者として聖僧の葬送儀礼に関与した人物であったかもしれない。Pot A の上段墨書に記されたサガブリアという師僧が死亡し、その弟子のチャトゥラ (?) が同僚や在家信者の援助をえて葬儀を営んだのではないかと想像することができる。

ところで Pot A の寄進文の中で、ヴァサヴァダタは自分の善行から得た功德の一部を他人にふり向けることを願った。仏教の教義ではそれを廻向と呼ぶ。サンスクリットでは *parināma*、英語では transfer of merit と翻訳する。Pot A の寄進文では *-pratya(m)śae* (……への [功德] の配分) ということばで表現する。廻向思想がインド仏教の中にいつ導入されたか、その起源などは目下論争中の問題である。インド仏教碑銘のなかで廻向思想が見られる最も古い例として挙げられるのは、中インドのバールフット (Bhārhuṭ) 仏塔周囲にたてられた欄楯 (玉垣) に刻まれた次ぎのような寄進文である (紀元前 2 - 1 世紀)<sup>3)</sup>。

*Sagharakhitasa mātāpituna athāyā dānam* サガラクヒタの母と父のための寄進

Sagharakhita (Samgharaksita) という名前から寄進者は出家者 (比丘) と思える。かれは仏塔欄楯の一部 (貫石) を寄進した。その行為は自分自身の功德になるが、それを自分の両親、たぶん死亡しているとおもえる両親のために廻向する、と記した。この一例をめぐって、廻向思想はインド仏教の中に早くから取り入れられていたとする意見と、これを例外と見て、廻向概念はインド仏教の輪廻説にもとづく因果応報、自業自得の宗教観と矛盾するところがあり、したがって廻向儀礼は大乗仏教の興隆とともに、新たに発達してきたものとする見方がある。<sup>4)</sup> その点で、Pot A の寄進文は仏教思想における廻向思想の発展を考えるうえで、その地域と時代に関連して興味ある研究資料となるであろう。



今、ここでは廻向思想の起源問題には直接立ちいらずに、Pot A に記された *-pratya(m)śa* (功德の配分) の用語を手がかりに、ガンダーラ仏教における廻向儀礼の事例を集めてみたい。さらに他のインド諸地域における廻向儀礼の実例を仏教碑銘から集め、地域的な比較をもこころみたい。

1 Wardak 出土の青銅製舍利容器 大英博物館蔵 51年在銘 (A.D.195年頃)

Wardak 村はアフガニスタンの首都カーブルの西南約50kmのところにある。この舍利容器は1836年、マッソン Charles Masson によって Wardak の仏塔のひとつから発掘された。出土状況は不明であるが、Wardak には現在もガンダーラ式石積仏塔がいくつか存在する (Fussman 1974: 69, Figs. 3-20)。寄進文は高さ17.6cmの青銅製壺の表面に4行にわたってガンダーラ語カロシュティ文字で点線によって刻まれている。寄進文の内容は下記のとおりである。<sup>5)</sup>

(カニシュカ紀元の) 51年, Arthamisi 月15日, このときに Kamagulya の息子である Vagramarega が…… (自分の名を冠した) Vagramarega-vihāra 寺院の仏塔中に, 世尊シャカムニ・ブツダの舍利を奉納させる。この善根によって (*kuśalamuleṇa*), 諸王中の大王フヴィシュカ Hoveška に主要な功德の配分 *agrabhagrae* があらんことを。私の母と父への供養のために (*puyae*), 私の弟 Haṣṭhuna Marega の供養のために, さらに私の血縁, 友人, 同僚の供養のためにあらんことを。また Vagramarega 自身に主要な功德の配分 *agrabhagra-padriyaṃśae* があらんことを。一切衆生 *sarvasatvaṇa* への無病の賦与 *arogadaḥṣiṇae* があらんことを。……この僧院は大衆部 Mahasamghiga の諸師の所領として寄進された。

寄進文は青銅製の舍利容器に刻まれていたが、その内容からすると、施主の Vagramarega が自分の名前をつけた仏塔を建立し、ブツダの舍利容器をそこに安置したことを記す。従って Vagramarega の寄進は舍利容器のみではなく、仏教寺院の創設であったと思える。施主は地方の有力者であろう。廻向の対象に当時のクシャン皇帝フヴィシュカ Huvishka を筆頭に挙げたのちに、自分の身の周りの血縁一族、友人、同僚たちに及ぶ。ただ、廻向にはハッダ Pot A の用語と同じ *-padriyaṃśae* (*-pratyaṃśa*) を使い、それに *agrabhagrae* (*agrabhaga* 主要な部分) という形容句をつける。Pot A には見られなかったが、「……の供養のため *-puyae* (*pūjā*)」を多用するが、これは廻向の対象を示すのに使用される一般的な用語である。最後にこの寄進を受ける小乗部派の名をあげているので、こうした廻向思想は部派仏教の時代、西北インドにおいてすでに大きな影響をもっていたことがわかる。

2 Rānigāt 出土の石刻 (1984, 1993年日本隊発掘) 85年在銘 (A.D. 229年頃)

私たち日本隊は1984, 86, 89年の3シーズンをかけて、パキスタンの西北部(古代ガンダーラ)に所在するラーニガート Rānigāt 仏教寺院址を発掘調査した。問題のカロシュティ文字石刻(長さ55cm, 高さ10cm, 奥行き14cm)は1984年に表土採集によって見つかったもので、正確な原位置は不明である。その後、遺跡の保存工事を続けていた時(1993年)、さきの石刻に連続すると思える断片が発見された。それには「85年」の年数が残存していた。私はそれらを含めて新出土のカロシュティ碑文として1997年ローマで開催された「南アジア考古学会 South Asian Archaeology 1997」で報告した(Odani 2000: 831-841)。刻文は次ぎのとおりである。

*Vasudeva maharaja devaputrasya agrabhaga parihaṃśadae bhava [tu]*

大王天子ヴァースデーヴァに主要な[功德の]配分がありますように

ここでも *-parihaṃśadae (-pratyamśa 配分)* という表現が使用されている。*agrabhaga* (主要な配分)をつけることも、さきの Wardak 寄進文と同じである。Rānigāt 寄進文は本来もっと長文のものであったと推定され、その全貌が不明なことは残念である。カニシュカ紀元85年は Wardak の51年より34年遅れるが、寄進文の形式、そしておそらく内容もほぼ同じと思われる。ある有力な人物が Rānigāt に仏塔を建立するか、大きな改修を行い、それから得た自分の功德を、上はクシャン皇帝ヴァースデーヴァ (Vāsudeva) から自分の縁者にいたるまで、さらには一切衆生に対しても、ふり向けることを願った寄進文である。

Rānigāt 遺跡には三カ所に大きな仏塔が建立されていた。そのうち東塔 (St. 101) と西塔 (St. 203) はクシャン王朝初期の創建であり、そのご幾度かの増広や改修を経ている。西南塔 (St. 301) はヴァースデーヴァ王の治世以後、クシャノ・ササン時代の建立である。この寄進文はおそらく東塔 (St. 101) が大規模に増広されたときに作成されたものであろう。

3 Tor Dherai 出土墨書陶片 ペシャーワル博物館蔵

Tor Dherai はパキスタンの西南部、バルチスタン州にあり、ガンダーラ地域とは遠く隔たっている。しかしそこにクシャン王朝時代、ガンダーラ仏教を受容した人びとが居住していたらしく、ハッダの場合と同じく、カロシュティ文字を使用して墨書で土器に寄進文を記した。これらの墨書陶片は1926 - 27年、A. スタインがこの地域を発掘調査したさいに発見した。陶片は35点あり、次のような内容に復元された (Konow 1929: 173-6, 塚本啓祥 1996: 104-6)。

この貯水池は Ṣahi Yola-Mira 自身の Yola-Mira-Ṣahi-vihāra (寺院) における四方

僧伽にたいして、説一切有部 Sarvāstivādin 諸師の所領として寄進されたものである。この正しい喜捨によって、母と父に主要な [功德の] 配分 *-pratiyaṃśo* が、そして一切衆生に主要な [功德の] 配分 *agre-pratiyaṃśo* がありますように。また法主 (施主) *dharmapati* に長寿が与えられますように。

ここでもガンダーラ寄進文と同じく、功德の配分を表現するのに *pratiyaṃśo* (*pratyamśa*) が使用されている。その前につく *agre-* は、*agrabhaga* (主要な部分) と同じ意味と考えて翻訳した。文面の寄進は貯水池であるが、寺院に自分の名前を付けていることから見ると、やはり施主は地方を代表する有力者であったと思える。

#### 4 Mānikīāla 出土の石刻 18年在銘 (A.D.162年頃) ルーブル博物館蔵

マニキャラの大きな仏塔はパキスタンの首都イスラマバード (ラウルピンディ) の南東約 32km の平野部に存在する。1834年にイギリスの軍人 General Court が大塔周囲にある小塔のひとつを発掘し、中心部に舎利安置の方形室とその蓋石を発見した。蓋石の裏側にカロシュティ文字による12行の寄進文が刻まれていた。銘の破損もあり、難解であるが、内容の概略は次のとおりである (Konow 1929: 145-150, 塚本啓祥 1996: 983-4)。

(カニシュカ紀元) 18年、クシャン大王カニシュカの治世に太守 (*kṣatrapa*) である *Veśpaśi* の委任を受けた施主の *Lala* が仏教寺院にブツの遺骨を奉納した。かれはこの善根によって (*Kuśala-mulena*)、自分の弟と造営監督者 *Budhila* に主要な [功德] の配分 *agra-paḍiśae* (*agra-pratyamśa*) が与えられるように願う。

マニキャラ仏塔は狭義のガンダーラ地域からはずれるが、仏塔建築の石積様式などから、タキシラとともにガンダーラ仏教圏の南端に位置させてもよく、善根 *Kuśalamula* や功德の配分 *-pratyamśa* など、ガンダーラ寄進文と共通の要素を持つ。

#### 5 ハッダ第13号塔出土の水壺 28年在銘 (A.D. 172年頃)

これは Charles Masson が 1834 - 8 年にハッダの仏教遺跡を発掘調査したさい、no. 13塔の内部から発見した壺形土器である。土器表面にカロシュティ文字の墨書が存在した (Wilson 1841: 111)。前述した最近ハッダ発見の土器出土状況と同じである (Salomon 1999: 60-61)。S. Konow らの解釈によると、「(カニシュカ紀元の) 28年に、仏塔の中へブツの遺骨を奉納し、その善根によって一切衆生の涅槃への資糧となり、(施主と思える) *Rama* または王 (*raja*) に主要な功德の配分 *agra-prachamśa* (*agra-pratyamśa*) が与えられますように」と

願う内容である。ただ、土器の実物は現存せず、みなMassonがハンド・コピーした銘文からの解読なので、正確さは期待できないかもしれない (Konow 1929: 157-8, Pl. XXX-2, 塚本啓祥 1996: 962)。

#### 6 Mathurāの石板刻文 Jamālpur遺跡出土 ラクノー博物館蔵

以上のように、ガンダーラ仏教圏では功德の配分を意味する *pratyamśa* の用語が寄進文中にしばしば使用されていた。ほかの地域ではあまり例を見ず、ガンダーラ仏教の特徴のひとつといえる。ガンダーラ以外ではマトゥラー出土のブラーフミー文字碑銘中に1例を見つけることができるだけである。ガンダーラとマトゥラー仏教とが密接な関係にあったからであろう。マトゥラーの寄進文は次のとおりである (Lüders 1961: 62-63, 定方晟 1990: 72-3)。

(前略) 母と父に主要な [功德] の配分がありますように、また一切衆生の利益・安樂のためになりますように。

*Mātāpitṛṇaṃ agra-pratyāśātāye bhavatu sarvvasatvānaṃ hita-sukhārthaṃ bhavatu*

主要な功德の配分を意味する *agra-pratyāśātāye* (*agra-pratyamśa*) などガンダーラ寄進文と共通する表現が使用されている。

#### 7 *udisa* (*uddisa*) の用語を使用する地域

西インドのKaṅheri石窟寺院の石窟壁面に刻まれた寄進文 (西暦1~3世紀) では、「母と父に功德をふり向ける」という意味で、*mātāpitāro udisa* の表現がしばしば使用される。ひとつの地域色と考えられる。かつてパーリ語經典によって廻向思想の起源を研究したJ. M. Agasseはパーリ語經典で廻向を表現するのに *dānam uddisati* あるいは *dakkhiṇaṃ ādisati* の用語がよく使用されるという。*dānam*, *dakkhiṇaṃ* は「贈物、寄進」であり、*uddisati*, *ādisati* は「ふり向ける」の意味である。両者の類似はおそらく西インドとスリランカとの密接な関係から生じた現象であろう。

Kaṅheri 第32窟の寄進銘を例に挙げると、その関係部分は次のとおりである (塚本啓祥 1996: 431-2, 定方晟 1988: 17-18)。

*Deyadharmā cātudise bhikusaghe paṭiṭhāpita mātāpitāro udisa savasatu hitasughatha*

四方比丘僧伽に対する寄進物として、母と父のため、一切衆生の利益・安樂のために

同じ表現はKaṅheri第32窟のほか、第21, 54, 65, 66, 81, 88窟にも見られる。ガンダー

ラ仏教碑銘によく使用された *saṃghe-caturdiśe* (四方僧伽) ハッダ出土 Pot B, C, D, E などという用語は、Kaṅheri 石窟では上のように *cātudise bhikusaghe* (四方比丘僧伽) と表現されることが多い。この表現の相違もガンダーラと西インドそれぞれの地域的特色を示すといえる。なお、Kaṅheri 第50窟の寄進碑銘に *puna bhāgo* (*punyabhāga* 功德の一部) という表現があり、功德を配分して廻向するという意識が示されているように思う。

#### 8 *pariṇāma* の用語を使用する地域

南インドのクリシュナ河流域にはサータヴァーハナ王朝期 (1 - 2 世紀) のアマラーヴァティー遺跡、イクシュヴァーク王朝期 (3 世紀) のナーガールジュナコングダ遺跡など、多くの仏教遺跡がある。とりわけナーガールジュナコングダの寄進碑銘は廻向を表現するのに、後世の大乗経典に見られるサンスクリット用語 *pariṇāma* (回転する, ふり向ける) をしばしば使用する。南インド仏教寄進文の地域色とすることができる。寄進碑銘の多くは仏塔や僧院に建立された石柱に刻まれた。以下に Nāgārujunakoṅḍa 大塔石柱の銘文 (部分) を示す。(塚本啓祥 1996: 320-1, 定方晟 1993: 8)。

*mahādevi Bapisirīṅikā apano mātaraṃ Haṃmasirīṅikaṃ pariṇamatuna atane ca  
nivāṇasamṇṇāpāḍake imaṃ selathambhaṃ paṭithapitaṃ*

バピシリニカ王妃がかの女自身の母ハンマシリニカに廻向し、また自分自身の涅槃の成就獲得のために、大塔にこの石柱を建立させた。

以上のように、廻向行為を表現するのに、地域的な用語が存在したことを確かめることができた。それは前述のハッダ出土の水壺の墨書寄進文にも当てはまり、ガンダーラ仏教を理解するのに多少とも役に立つかもしれない。なお、インド・ガンダーラ仏教寄進文中には「……のための供養 (*pūjā*)」の用語で廻向の対象を示す場合、あるいは「……とともに (*sahā*)」をつけ、廻向の対象者を寄進行為者の中に付け加える場合がある。カロシュティ文字、プラーフミー文字の寄進文を通覧すれば、自分の功德とあわせて他者への功德廻向を祈願する例が圧倒的に多いことに気づく。身近な親、兄弟、血縁一族をはじめとして、友人、そしてなかには当時の支配者にまで廻向の対象が及ぶ。また生きとし生けるもの (一切衆生 *sarvasatva*) に対する廻向も早くから登場する。ハッダ Pot A 墨書の欠落部分をサロモン教授は *sarvasatvana* (一切衆生) と補い、私が破損以前の写真によって *putradhitarāna* (息子, 娘) と訂正したけれど、Pot A の寄進文自体の意義はさほど大きく変わるものではない。

寄進する事物は仏塔、僧院の建立、あるいはその一部分の寄進があり、それには土地、田畑、貯水池などの不動産の寄進も必要であった。また僧院で使用される器具、家具、僧侶たちの日

常の衣食住が重要な寄進の品目であった。そのほか廻向儀礼のひとつとして、聖僧の葬送とその墓塔建立とがあり、つぎにガンダーラにおけるそれらの事例について考えてみたい。

### III 葬送儀礼と廻向思想

1 僧侶（比丘）の葬儀      ガンダーラ仏教が活動的であった西暦1～3世紀頃、あちこちの僧院において多数の比丘、比丘尼が規律を守って集団生活を送っていた。ところで、かれらの一人が死亡したときに、その葬儀はどのように営まれたか。それを語る文献資料は比較的少なく、また仏教研究者たちの間において、葬儀は世俗の信者がとり行うものであって、出家者は直接関わらないという先入観があったために、最近まであまり解明がなされてこなかった。しかし1990年前後からアメリカのショペン教授 G. Schopen はギルギット出土のサンスクリット本とチベット訳の『根本説一切有部律 *Mūla sarvāstivāda-vinaya*』を研究材料としながら、僧侶の葬儀に関して、それは同僚比丘の義務であると同時に、故人の遺産相続に関しては権利すら有していたと主張した。今回、アフガニスタンから出土した仏典写本や人骨を入れた壺形土器の意義を解明するとき、当然のことながら、サロモン教授もこのショペン教授の最新の研究を取り入れている (Salomon 1999: 81)。以下、私は主として漢訳經典を資料としながら、ガンダーラの比丘たちが行った葬送儀礼と廻向思想について考えてみたい。

義浄『南海寄帰内法伝』第二巻、尼衣喪制、には、インドの僧侶の葬儀が次のように記されている (大正蔵経54: 216c)。その内容は義浄 (635 - 715) がインド留学中に見聞したことがらであったと思われる。

一人の比丘（苾芻 *bhikṣu*）が死亡すると、故人と親しい関係にあった同僚比丘たちが葬儀に参列する。死亡が確定したその当日に遺体を担架に載せ、火葬場に運び、荼毘に付す。参列者たちは遺骸を前に、それぞれの座具を用意して坐る。読経の得意な比丘に『無常経』を読誦させる。それは半紙一枚分に収まる短い経で、人々を疲れさせないでいどのものである。火葬が終了すると、人びとはそれぞれ『無常経』を心に念じながらその場をひきあげる。比丘たちは僧院に入る前に、外にある池あるいは井戸において身体と衣類を洗いきよめる。乾いた新しい僧衣に着替えて、僧房に入る。僧房の床は牛糞を塗って清浄にする。その他のことはみな普段どおりであり、喪服を着用することはない。

時によっては、火葬した遺骨 (*śarīra* 設利羅) を收拾して、故人のために塔 (ストゥーパ) を立てることがある。それは俱攞 (*kūla*) と呼ばれる。形式は小形の仏塔のようであるが、上に相輪を立てない。なお凡僧と聖僧の塔のあいだにも区別がある。これらのこと

については、律の本文に詳しく規定してある。

義浄の文章は前半と後半に分かれ、前半は僧侶の葬儀について、後半は故人のための供養塔建立についての記述である。確かに義浄訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻18（大正蔵経24：286c-292a）には、ほぼ同じ内容の条文が記述されており、その条文を制定する因縁となった二つの事件があわせて語られている。事件はいずれもブッダの生存中のできごととし、最初の事件の舞台はコーサラ国の首都シュラーヴァスティー、第二はマガダ国の首都ラージャグリハとシュラーヴァスティーで展開する。しかし律の編纂はもっと後世のことであるので、それを歴史事実と見るよりも、条文の由来を説明するために創作された説話と考えたほうがよい。

（第一話） シュラーヴァスティー市に住むある長者の一人息子がブッダのもとで出家したが、まもなく死亡した。同僚の比丘たちはどうしてよいかわからず、遺体と衣、鉢を道端に放置した。市民たちはそれが長者の息子であることに気づき、非情な取りあつかいに腹を立て、教団を非難した。ブッダは比丘たちに向かい「比丘が死亡したときは、供養を行い、火葬に付さなければならない。火葬のさいに柴が得られなければ、河の中に棄葬してもよい。もし河がなければ、地中に埋葬せよ。……遺骸を供養するさいには、読経の得意な比丘に『三啓無常経』を読誦させよ。あわせて伽他 (*gāthā* 偈頌) を唱えて、故人のために呪願させよ。葬儀が終了すれば、……僧院に戻れ。遺体に触れた者は身体と衣類を洗わねばならない。触れなければ、手足を洗うだけでよい。僧院に戻ったならば、チャイティア (制底 *caitya*) に参拝しなければならない。<sup>6)</sup>

ガーサ (偈文) を唱えて呪願すること、葬儀から僧院に戻ったときにチャイティア (礼拝堂) に参拝することが、義浄の文章にぬけていたが、義浄は律文の全部を紹介したわけではない。呪願するとは、遺体を供養し、その功德を故人にふり向けること、つまり廻向することである。資格のある比丘がそれを担当したのであろう。またチャイティアの礼拝はブッダの涅槃後であれば、ブッダの舍利塔、つまり仏塔 (窣覩波 *stūpa*) への礼拝を意味しよう。

義浄の文章の後半に述べられた故人のための供養塔 (墓塔) 建立については、もうひとつ別の事件を契機に規定が作られた。それはブッダに先立って死没した二人の仏弟子、舍利弗 (シャーリプトラ *Śāriputra*) と大目 (乾) 連 (マハー・マウドガルヤーヤナ *Mahāmaudgalyāyana*) の殉教と葬儀、遺骨塔建立までの物語である。第一話に引き続いて、同じ『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻18（大正蔵経24：287a-292a）に載せられている。かなり長文であるので、本論に関係するところを抜粋して概要を以下に紹介する。

(第二話) 舍利子(舍利弗)と大目連は人が死後に赴く五つの世界(地獄道、餓鬼道、畜生道、人道、天道)を巡回し、人びとの救済に当たった。あるとき、二人は無間地獄に至り、猛火に苦しむ亡者の上に雨を降らせて、しばしの安らぎを与えた。そこに外道の師ブラーナ(哺刺拏 *Purāna Kāśyapa*)がおり、生前に邪悪な教えを説いたことにより、地獄に落ちて苦しみを受けていた。ブラーナは二尊者を見ると、どうか地上世界に戻ったら、自分の弟子たちに伝えてほしいと、次ぎのように語った。「私は邪法を説いて人びとを惑わせたゆえに、その悪業の力によって無間地獄に生まれ変わった。大きな身体となり、舌の上には500台の鉄犁がのり、それらが舌を耕すので、血まみれとなり、極度の苦痛にさいなまれている。しかも私の弟子たちが私の遺骨塔を供養するたびに、私の苦痛は激化する。どうかこれから先、私の塔を供養するのをやめてくれ」と。

やがて舍利弗と大目連は地獄から王舎城(ラージャグリハ)に戻った。そして大目連が城内を歩いていると、「執杖推髻」流派の外道たちと路上で出会った。外道たちは仏教徒を仇敵視し、機会があれば打ちのめそうとしていた。大目連はかれらに向かって言った。「君たちの師ブラーナは生前に邪悪な法を説き、人びとを惑わせたことにより、無間地獄に落ちて耕舌の苦痛を受けている。ブラーナは君たちに次ぎのように言っていた。『おまえたち、これ以上私の遺骨塔を供養しないでくれ。おまえたちが供養するたびに、私の身の苦痛は激化するばかりだ』と。」これを聞いた外道たちは激怒して、大目連に襲いかかった。大目連の身体は外道たちの杖で乱打され、皮膚は破れ、血、肉がとび出し、爛れ果てた姿で大地に転がされた。舍利弗がそれに気づいた時にはもはや手遅れであった。舍利弗は自分の上着に大目連を包み、赤子を抱きかかえるようにして竹園寺へ連れ帰った。

舍利弗は大目連に尋ねた。「仏弟子の中において神通第一と称されるあなたがどうして難を避けることができなかつたか。」大目連は「シャーリプトラよ、これは私の業が成就した結果なのであって、どうしようもないことである(舍利子、此是業熟。知欲如何。)」と答えた。大目連はブッダに最後の別れを告げ、林圀村の親族のもとに赴いてそこで息を引きとった。一方、舍利弗のほうも大目連の受難の様を目撃して以来、意気消沈し、やはりブッダに最後の別れを告げ、生地ナーランダ(那羅陀)村の親族のもとに赴いて、息を引きとった。

最後まで舍利弗につきそった弟子のチュンダ(準陀 *Cunda*)は、舍利弗の遺骸を焚焼供養し、その遺骨ならびに衣、鉢をもって王舎城に戻ってきた。かれは仏弟子アーナンダ(阿難陀)のもとを訪れて舍利弗の涅槃したことを報告し、舍利弗の遺骨と三衣、鉢をさしだした。アーナンダは舍利弗の遺骨を受けとると、それに香、華を供え丁重に供養した。

その後、ブッダは弟子たちとともにマガダ国王舎城から祇園精舎のあるコーサラ国のシュラーヴァスティー城に赴いた。アーナンダは舍利弗の遺骨を携えた。シュラーヴァスティー



の給孤長者は舍利弗を心から敬愛していた。今、舍利弗が涅槃し、その遺骨をアーナンダがみずから供養していると聞き、自分も供養したいので譲ってほしいと申し入れた。アーナンダは応じなかった。そこで長者はブッダに懇願した。ブッダはアーナンダに対して長者に舍利弗の遺骨を渡すように説得し、アーナンダもようやくそれに応じた。長者は遺骨を自宅に持ち帰り、それを壇上に安置し、一家そろって香、華、奇貨をそなえて丁重に供養した。それを聞いてコーサラ国王のブラーセナジット（勝光王）、勝鬘夫人、行雨婦人をはじめ、城内の長者たちがみな香、華、奇貨をもって礼拝、供養に訪れた。しかし一般の人びとには不便であった。かれらは「長者が門を閉ざして、われわれが福業を行うのをさまたげている（長者閉門、障我福路）」と不平をこぼした。

そこで給孤長者はブッダのもとを訪れて申し上げた。「どこか見晴らしのよいところに、尊者シャーリプトラの遺骨を安置する窣覩波（ストゥーパ）を建立したいと思います。そうすれば大勢の人がいつでも好きなように礼拝できます。」ブッダはそれに承諾を与え、窣覩波（ストゥーパ）の築造法を長者に指示した。「レンガ（甄）を用いて二重の基壇 *medhī* を造り、その上に塔身を置き、覆鉢 *anda* をかぶせる。高さは随意でよい。覆鉢の上に平頭 *harmikā* を置く。その高さは 1, 2 尺、一辺 2, 3 尺四方。その中央に大小に応じた竿 (*yaṣṭi* 刹柱) をたて、相輪 (*chattrā* 傘蓋) をとりつける。相輪の枚数は一、二、三、四枚から十三枚まで。最後に宝瓶をのせる。」長者はブッダに尋ねた。「このような窣覩波（ストゥーパ）はシャーリプトラにのみ許されるのでしょうか、他の人にも当てはまるのでしょうか。」ブッダ、「如来（ブッダ）のために窣覩波（ストゥーパ）を造るときも、それと同じにすれば十分である。もし独覚のためのストゥーパであれば、宝瓶をのせなくともよい。もし阿羅漢のストゥーパであれば、相輪は四重にせよ。不還のためのストゥーパであれば、相輪は三重、一來のためのストゥーパであれば、相輪は二重、預流のためのストゥーパであれば、相輪は一重でよい。なお一般僧や信者（凡夫、善人）のためのストゥーパであれば、平頭だけで、相輪をつける必要はない。」比丘たちはなおストゥーパをどのように配置するか知らなかった。それについてブッダは次のように指示した。「世尊（ブッダ）が説法されているときのように、大師ブッダの塔（制底 *caitya*）を中心に安置し、その両辺に大声聞（長老の仏弟子）の塔を配置し、その他の仏弟子、尊者たちの塔は、形の大小によって適宜に配列せよ。なお一般僧や信者（凡夫、善人）の塔は寺院の外に造らねばならない。」<sup>7)</sup>

以上が『根本説一切有部毘那耶雜事』に記述された内容である。義浄が記した聖者の遺骨塔（窣覩波、ストゥーパ）の築造法が、その背景になった逸話とともに語られていた。逸話の中には外道（異教徒）たちのあいだにも師匠の遺骨塔（ストゥーパ）を建立し、供養する慣例があっ

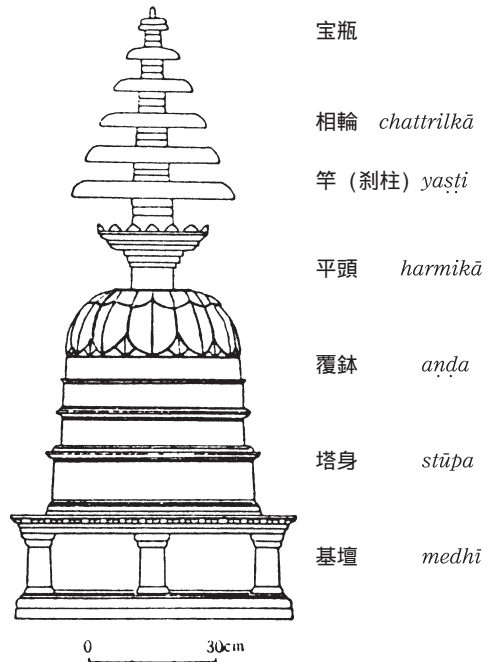


Fig. 3 ローリアン・タンガイ仏塔 (緑泥片岩製)  
Small stone stupa from Lorian-Tangai, Gandhara. Calcutta Museum (H. 145cm)

たことを伝える。しかし外道の師プラーナは地獄に陥っており、弟子たちがかれの塔を供養すればするほど、かれの身に苦痛が増す。それは仏教徒側の理論であるかもしれないが、そこに逆効果の「供養と廻向」のメカニズムが説明されていておもしろい。一方、大目連は神通第一と称されながら、外道の衆にめった打ちされ、無抵抗であった。引用を省いたが、律文中ではブッダは大目連の前世を解き明かし、それが因果応報で免れ得ないものであったと語る (大正大蔵経24: 290b, c)。そのほか律文中に示された重要な点は、窣覩波 (ストゥーパ) の築造法と安置法である。シャーリプトラの遺骨塔としてブッダから指示された形式は、現実には古代インド初期美術のサーンチー大塔よりも、西暦 2, 3 世紀頃に建立されたガンダーラの仏塔形式をおもわせる。方形基壇を二重すること、基壇と覆鉢 (半球形) のあいだに円筒部 (塔身) が存在することなどである。ここではガンダーラ仏塔の例としてローリアン・タンガイ遺跡から出土した小石塔を参考に挙げる (Fig. 3)。

もうひとつの重要点はストゥーパ (塔) が聖者の遺骨安置を目的として建立されたことである。ただし、遺骨塔が建立される資格は限られる。ブッダとその高弟たち (大声聞)、独力でさとりを得た独覚 *pratyeka-buddha* と呼ばれる人たち、さらに聖者として修行の道に入り、四果を証した人たち、最高位の阿羅漢 *arhat*、第三果の不還 (阿那含 *anāgāmin*)、第二果の一来

(斯陀含 *sakṛdāgāmin*), 初果の預流 (須陀洹 *srota āpanna*) の聖僧である。ランクの違いは塔の形式に反映され、傘蓋の個数で区別する。それ以外の一般僧はまだ迷いの世界にあったものとされ(凡僧), 在家の信者(善人)とともに、僧院外に埋葬されるという。

2 ガンダーラにおける墓塔建立の実態 サロモン教授はアフガニスタン、ハッダ出土といわれる仏典写本の出土状況を理解するために、過去2世紀にわたる遺跡調査の報告書を検討した。その結果、類例はさほど数多くないが、その多くがハッダ周辺に集中することが判明した (Salomon 1999: 77-81)。ハッダ地域がガンダーラ本土よりも内陸部にあり、乾燥して白樺樹皮や人骨が保存されやすいことも幸いしたが、やはり当時ハッダが仏教の一大聖地であったことが大きな要因ではないだろうか。

中国の巡礼僧の法顕や玄奘によると、ハッダ(藍羅城)にはブッダの錫杖、袈裟とともに仏頂骨を安置する寺院があって、各地から参拝者を集めていたという。またハッダの北方10kmのところ、カーブル河右岸に位置するナガラハラ(那揭羅曷国)、現在のジェララバードにも多くの聖地が存在した。まず「城東二里」のところには、むかし燃燈仏(Dipamkara Buddha)がバラモン修行者の若者に会い、布髪供養を受けたのち、若者に対して未来に釈迦牟尼仏として生まれ変わるであろうと授記(予言)を与えた場所がある。玄奘はアショカ王がそこを記念して建立したという大仏塔を見たと記す。また「城西南二十余里」の山際には仏影窟があり、その中で心を込めて祈れば、ブッダの姿が彷彿として現れると伝えられていた。仏影窟付近にある寺院には千基におよぶ阿羅漢、辟支仏(独覺)の塔があったと法顕は記している。このようにハッダ周辺地は仏教の一大聖地と考えられていたために、他所よりも僧院、仏塔が数多く建立されたのである。<sup>8)</sup>

1834-38年頃にかけて、当時アフガニスタンに在住したマッソン Charles Masson はこのハッダ周辺に残存する無数の仏塔に目をつけ、宝物探的に軒並みその中心部に発掘坑をあけていった。内部には小室があり、大小の納骨容器、その中には人骨や灰、貨幣、貴金属細工などが含まれていた。文字の書かれた白樺樹皮(tuz-leaves)の存在にも気づいたが、取り上げることは困難であった。マッソンの収集品はすべてボンベイの東インド会社に買い取られ、最終的には大英博物館に収蔵された。またかれが書き残した発掘記録は、H.H. Wilson によって整理され、その著書 *Ariana Antiqua*, London 1841に収録された。それによって簡単ながら発掘の状況がわかるのは幸いである。マッソンは背の高い塔をTopeと呼び、背の低い小さな塔をTumulusと呼ぶ。塔の中を開いて人骨や灰のみであれば、聖者の墓、貨幣があれば王侯の墓、塔が群集して存在すれば家族墓と考えたらしい (Wilson 1841: 58,90-91)。マッソンはそれが仏教施設であるという明確な認識もなく、まして中国巡礼僧の旅行記の存在も知らず、また遺跡周辺に散見していたはずの仏像彫刻や僧房跡についてはほとんど注意をはらっていない。全体をまるで広大な墓域と考えていたようである。

マッソンは人骨を蔵した土器 (funereal jars) の存在については関心を向け、塔以外のところから多数の納骨土器が発見される可能性を指摘する。その場所のひとつはタバ・カローン仏塔の付近、ちょうどハッダ村落の背後にあたる丘斜面であった。納骨土器には大小あり、高さ90cmのものから高さ15cmのものまであり、みな白く塗られ、頸、肩部に直線や円形花文がつく。内部には人骨と灰が入っており、土器の口は必ず石で蓋がされていた。土器頸部のところに緑青がつくのは、銅貨が添えられていたに違いないという。中には一直線上に並ぶものがあり、同一家族の納骨土器であったとする (Wilson 1841: 112-113)。<sup>9)</sup>

Ch. マッソン以降にハッダ遺跡の発掘を手がけたのは、フランス考古学調査団のバルトゥ J. Barthelemy であった。かれは1926 - 27年の二シーズンのうちに、ハッダの13遺跡、530基の仏塔を発掘し、ストウコ仏像を一万点以上収集した。バルトゥはいくつかの小塔内部から納骨土器を発見し、また白樺樹皮の仏典写本の存在に気づいてはいるが、マッソンと同様に適切に保存することができなかった。バルトゥは小塔の中にまったく納骨土器を安置した痕跡のないものがあり (塔全体の50%程度と推定)、また納骨土器は小塔以外のところ、たとえば寺院回廊の床下、階段、小祠堂内からも発見されると指摘する。したがってバルトゥは小塔の主要目的が遺骨安置であることを認めるが、小塔 = 墓塔とは考えなかった (Barthelemy 1933: 2-3, 59-61)。

最近、アフガニスタンの考古学者がハッダの発掘調査にのり出した。しかし1979年の内戦勃発以来中断されたままになっている。その中間報告によれば、納骨土器は小塔以外の祠堂壁沿いなどから発見されたという (Tarzi 1990: 720, Fig. 13)。

最後にパキスタンのガンダーラ寺院址における小塔建立の実態について述べてみたい。私たち日本隊はパキスタンにおいて三カ所のガンダーラ仏教寺院址を発掘調査した。最初に手がけたメハサンダ Mekhasanda 遺跡は山腹に小規模に営まれた寺院であり、主塔 (基礎径約 5 m) の前面に小塔が 4 基、右側に 5 基、後部に 9 基が存在した (水野清一 1969: 12-13, plan 2)。タレリ Tareli 遺跡は主塔が三カ所に分散して存在する寺院形式であった。そのうちの D 区塔院と呼んだところでは、主塔 (基礎径約 4 m) の周囲に小塔が 9 基存在した (水野清一、樋口隆康 1978: Figs. 14, 40-42)。そのほか、主塔をとりかこむ小祠堂のなかにも小塔を安置した形跡があり、もしそれら小塔がみな墓塔とすれば、屋内の小塔と屋外の小塔との間にどのような区別があったのか、先に検討した律文だけではわからない問題を含む。最後の調査となったラーニガート Rānigāt 遺跡は規模が大きく、主塔自体 (St.101) が改修増広されているので複雑であった。最終的には主塔 (基礎径約 6 m, 基壇 11.4m × 10m) の周囲は30基以上の小塔でびっしりと埋め尽くされた。なかには古い小塔の上に新しい小塔を築いている例があり、当時の人びとがいかに主塔に近接して小塔 (墓塔) を築こうとしたか、その熱意と苦心がうかがえる (西川幸治 1994: plan 3, pls. 13, 14)。

残念ながら、私たちは三寺院の発掘中、小塔内に納骨土器を発見するという機会には恵まれなかった。それだけ遺跡がすでに大きな破壊をこうむっていたといえる。しかし発掘当時は主塔の調査に主力がそそがれ、小塔一つひとつにまで十分な注意がまわらなかったことも事実であり、今後の反省にしたい。ただ、バルトゥがハッダにおいて観察したように、床下に納骨土器を埋蔵し、その上に小塔を築くことがあるとすれば、小塔を根こそぎ除去しない限り納骨土器を見つけることはできない。私たちの現在のような調査方法では限界がある。伝ハッダの納骨土器、仏典写本の出土状況は不明であるが、もしそれらが遺跡の全面的破壊の結果、発見されたものだとすれば、遺跡保存と研究進展をめざす考古学者にとって感慨深いものがある。

#### IV む す び

今回のアフガニスタン、ハッダ出土といわれるカロシュティ文字ガンダーラ語仏典写本は、これまで考古学資料や美術作品からクシャン時代ガンダーラ仏教の性格を研究してきた私には新鮮な驚きであり、その研究成果に対する期待は大きい。新資料の価値はもちろん写本そのものにあるが、その写本埋蔵の状況も興味深い。写本を入れた土器や納骨土器に墨書された寄進銘文を読むと、当時の人びとの信仰心が伝わってくるような気がする。善行にはげみ、それから得られる功德を、亡き父母、近親者、さらには一切衆生にまで分け与えることを願う。それが輪廻説にもとづく因果応報、自業自得の概念と矛盾すると指摘されるが、当時の寄進碑銘を読む限り、人びとは在家、出家を問わず、亡き父母を供養し、廻向することに熱心であった。

ショペン Schopen 教授はこうした出家者たちの葬送行為を律文と仏教碑銘から明らかにし、結論としてインド、ガンダーラの仏教遺跡に残る小塔群は、比丘たちが亡き師僧のために営んだ墓塔の集合であり、主塔を中心とする塔院は信者の礼拝場所であると同時に、高僧たちの墓地であることを明らかにした (Schopen 1994b: 273-279)。かつてガンダーラの仏教寺院を発掘しながら、小塔群を漠然と信者たちが奉獻する供養塔 (votive stupa) と考えていた私には耳の痛い話であった。しかし律文にもとづいて小塔の大部分が聖僧の遺骨塔 (stupa-tomb) であると解釈しても、それが故人の墓標あるいは墓石とは違うことに注意しなければならない。聖者崇拜と同じではない。小塔が礼拝、供養に値する点ではブッダを本尊とする仏塔に等しい。むしろ小塔の本尊もブッダであり、ブッダに供養することで、被葬者にも、供養者にも功德が生ずると理解したほうがよい。

後世の漢文經典によると、親戚縁者が故人のために追善供養すると、その功德七分のうち一分が故人に、残りの六分が供養した本人に配分されるという。<sup>10)</sup> 功德の廻向であり、故人に功德の割り当てが少ないのは、やはり生前に本人が善行を積むことの大切さ (自業自得) を力

説するからである。このように功德を部分的に配分する表現は、ガンダーラ寄進文の特色の一つであることをさきに指摘した。こうした「功德七分」の觀念が直接、間接にガンダーラ仏教の影響を受けているとすれば、興味深い。

最後にガンダーラで客死した中国巡礼僧の智巖について述べて、結びとしたい。智巖は西暦399年、当時の仏教大国であるガンダーラ（罽賓）に留学した。摩天陀羅精舎という寺院に止住し、大禪師ブッダセーナ（仏大先）のもとで禅法を学んだ。三年間で優に十年を超える修行の成果を得た。帰国するに当たり、ブッダバドラ（仏駄跋陀羅）という禪師を伴い、長安に戻ってきた。長安にはすでにクチャ出身の鳩摩羅什が活躍していたが、その後、この二人が長安仏教界をリードしたことはよく知られている。一方、智巖は晩年に至って思い悩むことがあった。それは若いときに五戒を受けながら戒を犯すことがあった。その後に具足戒をうけて正式に僧となったが、資格に欠けるのではないかと悩みはじめた。長年にわたり禅観を行ったが、自力では解決することができなかった。そこで再度インドに渡り、明達の師に判断を仰ごうと決心した。海路によりインドに入り、ある羅漢比丘に出会い、事細かに相談した。羅漢は直接に答えることはせず、智巖のためにヨーガ行（入定）を行い、トゥシタ天宮に昇って弥勒菩薩に尋ねてくれた。弥勒の答えは「戒を得る」であった。智巖は大喜びして、インドからガンダーラを経由して帰国しようとした。しかしガンダーラに到着した時、天寿を全うして客死した。年78歳であった。

智巖の葬儀はどのように行われたか。当時、智巖は智羽と智遠という二人の弟子をつれていた。おそらくこの二人の弟子が地元の僧たちの協力を得て、智巖の葬儀を行ったと思える。智巖の伝記によると、ガンダーラでは火葬に付する場所が凡僧と聖僧とでは違っていた。智巖は戒操高明とはいえ、得果がどの段階にまで進んでいたか不明であった。はじめ遺体を凡僧の火葬場所へ運ぼうとしたが、重くて動かすことができなかった。聖僧の方向へ向けてみると、飄然として軽々と運ぶことができた。智巖は最後に奇跡をあらわし、聖僧の墓地に葬られることになった。墓塔が建立されたかどうか、智巖の伝記ではわからない。もしかりにラーニガート寺院内にかれの墓塔があるとすれば、それは古い小塔群の上に重なるように建立された、あの晩期の小塔群の一つになる。あるいはもっと遅い時期まで仏教活動が存続したあの聖地ハッダに葬られたのかもしれない。智羽と智遠とは師匠智巖の死亡とその時に現れた奇跡を知らせるために、わざわざガンダーラから中国へ戻ってきた。そして二人は再び外国へ戻って行ったと智巖の伝記は結ぶ。<sup>11)</sup>

注

- 1) イタリア調査隊長 D. Faccenna は最近出版の報告書の中で、スワート地区の仏教遺跡 Saidu Sharif の大塔周辺から出土した仏教浮彫に対して西暦 25 - 50 年頃、つまりクシャン王朝支配以前の年代を与える。Faccenna 2001: 27 参照。
- 2) Fig. 2 の写真は栗田功氏から提供を受けた。同じ写真に私の解説を付けてサロモン教授に送付したところ、丁寧な教示をいただき、本論の中に生かすことができた。両氏に深くお礼申し上げる。
- 3) この碑銘については、塚本啓祥 1996: I, 594, Bhārhut no. 163, および Schopen 1997: 58, その他にとりあげられている。
- 4) Schopen 教授はインド、ガンダーラの碑銘資料にもとづき、廻向思想が部派仏教（小乗）教義の中に発生していると主張し、従来の考え方を批判したが（Schopen 1985 = Schopen 1997: 23-55）、H. Bechert (1992) 教授は、なお廻向が大乗仏教に本質的な思想であるとして Schopen 新説を再批判し、従来の説を補強しようとする。廻向の起源に関する従来の議論は以下の論文に詳しい。J. M. Agasse, *Le transfert de mérite dans le bouddhisme pâli classique. Journal Asiatique* 266, 1978, pp. 311-332, および J. Filliozat, *Sur le domaine sémantique de punya. Indianisme et Bouddhisme, Mélanges offerts à Mgr. Étienne Lamotte.* Louvain-La-Neuve 1980, pp.101-116. なお日本での廻向研究は大乗思想との関わりで取りあげられることが多い。梶山雄一『さとりと廻向 大乗仏教の成立』人文書院 1997。
- 5) アフガニスタン、Wardak 出土の青銅器舍利容器の基礎的文献は以下のとおり。Konow, S. 1929: 165-70, pl. XXXIII, Fussman, Gerard 1974, Errington, Elizabeth and Cribb, Joe (ed.) 1992: 174-175, Zwalf, W. 1996: 356, pl. 680. 塚本啓祥 1996: I, 1016-7.
- 6) 該当の文章は Schopen 1995: 488-489 に、資料 II としてチベット訳経典からの英語訳が載せられている。漢訳、チベット訳を対照してみると、内容にほとんど差異がない。
- 7) チュンダ（準陀）がシャーリプトラの遺骨をラージャグリハにもちかえり、アーナンダに手渡すところ以下の文章が、Schopen 1995: 491-494 に、資料 IV としてチベット訳経典から英語訳されている。資料 II の場合と同じく、漢訳経典の内容とよく一致する。
- 8) 日本隊が 1966 年 12 月から 67 年 1 月にかけて、ジェララーバードとハッダ周辺で実施した考古学調査は、次の二冊の報告書に収められている。水野清一 1968: 59-86（第二部 ラルマ寺院址）、水野清一 1971: 55-84（第二部 ジェララーバードとカーブル周辺の仏教遺跡）。
- 9) マッソンが納骨土器に銅貨が添えられたと観察したが、それは同時代の中央アジアの葬送儀礼からみて、死者（の魂）があのだに旅立つときに、河の渡し守に支払う貨幣であったと考えられる。ギリシア・ローマの Charon' obol と共通する風習である。もう少し想像を広げれば、マッソンがアフガニスタンの仏塔を発掘し、舍利室に貨幣を発見すれば「王侯の墓」と呼んでいたように、それらの貨幣も大部分は死者に持たせるためであったかもしれない。仏塔の舍利室からなぜ貨幣が見つかるのか、漠然と仏塔と呼んでいた中に墓塔的な性格を考えるならば、そのナゾが解明できる。中央アジアの葬送儀礼については、小谷仲男「死者の口に貨幣を含ませる習俗」『富山大学人文学部紀要』10, 1986, pp. 1-19, および小谷仲男「クシャン王朝勃興史に関する新資料 ティリア・テペの黄金遺宝」『富山大学人文学部紀要』18, 1992, pp. 1-25 を参照されたい。後者の論文は、小谷仲男 1996: 72-15 に所収。
- 10) 実叉難陀訳 (A.D. 695-700) 『地藏菩薩本願經』下巻に次のように記されている（大正大藏經 13: 784b）。「男であれ、女であれ、もしその人が生前に善因を修めず、かえって罪惡を犯して死亡したとしよう。その親族一同が故人のために追善供養を行うとすれば、その功德全体の七分の一だけが死者の取分となり、

のこり六分の功德は生者親族の取分となる。それゆえに善男善女は現在、未来にわたって自ら善行を修め、功德を獲得するほうがよいと承知すべきである。」同じ内容が、東晋・帛尸利蜜多羅訳『灌頂随願往生十方淨土經』巻11にも記述されている(大正大蔵経21:530a)。ただ、第11巻が帛尸利蜜多羅訳(A.D. 310-340)というのは疑わしい。この「功德七分」の観念は、生存中に自らの死後を供養する「逆修(ぎやくじゅ)」の風習を発展させ、自分自身で「七分全得」という考えを生む。

- 11) 智蔵の生涯については、小谷仲男「ガンダーラの瑜伽師と弥勒信仰」(『富山大学人文学部紀要』20, 1994, pp. 1-21, 同論文は小谷仲男 1996: 241-247に所収)を参照されたい。智蔵の伝記は僧祐『出三蔵記集』巻15(大正大蔵経55: 112b-113a)と梁・慧皎『高僧伝』巻3(大正大蔵経50: 339a-c)に載せられている。そのうち、『高僧伝』智蔵伝については、Shih, Robert (tr.) 1968: 120-123にフランス語訳されている。Shih氏は「罽賓」をCachemireカシュミールと訳しているが、ガンダーラ Gandhara と考えるべきである。

## 参考文献

- Allon, Mark. 2001. *Three Gāndhārī Ekottarikāgama-type Sūtra : British Library Kharoṣṭhī Fragments 12 and 14*. University of Washington Press.
- Barthoux, J. 1933. *Les fouilles de Hadḍa*. Vol.1, *Stupas et sites, texte et dessins. Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan* 4. Paris.
- Bechert, Heinz. 1992. Buddha-Field and Transfer of Merit in a Theravāda Source. *Indo-Iranian Journal* 35: 95-108.
- Braarvig, Jens ed. 2000. *Buddhist Manuscripts (Manuscripts in the Schoyen Collection I)*. Vol. I, Oslo.
- Braarvig, Jens ed. 2002. *Buddhist Manuscripts (Manuscripts in Schoyen Collection III)*. Vol. II, Oslo.
- Brough, John. 1962. *The Gāndhārī Dharmapada*. Oxford University Press, London.
- Errington, Elizabeth and Cribb, Joe ed. 1992. *The Crossroads of Asia: Transformation in Image and Symbol in the Art of Ancient Afghanistan and Pakistan*. Cambridge.
- Faccenna, Domenico. 2001. *Il fregio figurato dello stūpa principale nell'area sacra Buddhista di Saidu Sherif I (Swat, Pakistan)*. IsIAO-Roma.
- Foucer, A. 1905. *L'art Gréco-bouddhique du Gandhāra*. Vol.1. Paris.
- Fussman, Gérard. 1969. Une inscription Kharoṣṭhī à Hadḍa. *Bulletin de l'école française d'extrême-orient* 56: 5-9, pls. I-III. Paris.
- Fussman, Gérard. 1974. Ruines de la vallée de Wardak. *Arts Asiatiques*, XXX: 65-130. Paris.
- Huber, Édouard tr. 1908. *Sutrālamkāra, traduit en français sur la version chinoise de Kumārajīva*. Paris.
- Konow, Sten. 1929. *Kharoṣṭhī Inscriptions. Corpus Inscriptionum Indicarum*. Vol. 2, part 1. Calcutta.
- Lüders, H. 1961. *Mathurā Inscriptions*. Göttingen.
- Marshall, John. 1951. *Taxila*. 3 vols. Cambridge University Press.
- Odani, Nakao. 1996. *Gandhāran Art and the Kushan Dynasty*. Dōhōsha, Kyoto.
- Odani, Nakao. 2000. New discoveries from the excavations at Rānigāt, Pakistan. *South Asian Archaeology 1997*. Rome, pp.831-841.
- Salomon, Richard. 1999. *Ancient Buddhist Manuscripts from Gāndhāra : The British Library Kharoṣṭhī*



## ガンダーラ仏教における廻向儀礼

- Fragments*. The British Library and University of Washington Press 1999.
- Salomon, Richard. 2000. *A Gāndhāri Version of the Rhinoceros Sūtra: British Library Kharoṣṭhī Fragment 5B*. University of Washington.
- Schopen, Gregory. 1994a. Ritual rights and bones of contention : more on monastic funerals and relics in the *Mūlasarvāstivāda-vinaya*. *Journal of Indian Philosophy* 22: 31–80.
- Schopen, Gregory. 1994b. *Stūpa and Tīrtha* : Tibetan Mortuary Practices and an unrecognized form of burial Ad Sanctos at Buddhist sites in India. In *The Buddhist Forum*. Vol.3. London, pp.273–293.
- Schopen, Gregory. 1995. Deaths, Funerals and the Division of Property in a Monastic Code. in D. S. Lopez Jr. ed., *Buddhism in Practice*. Princeton, pp.473–502.
- Schopen, Gregory. 1997. *Bones, Stones, and Buddhist Monks : Collected Papers on the Archaeology, Epigraphy, and Texts of Monastic Buddhism in India*. University of Hawaii Press, Honolulu.
- Shih, Robert tr. 1968. *Biographies des moines éminent (Kao seng tchouan) de Houei-kiao*. Louvain.
- Tarzi, Zemaryalai. 1990. Tapa-e-Top-e-Kalân (TTK) of Hadda. In Maurizio Taddei ed., *South Asian Archaeology 1987*. Rome, pp.707–726.
- Wilson, H. H. 1841. *Ariana Antiqua: A Descriptive Account of the Antiquities and Coins of Afghanistan*. London.
- Zwalf, W. 1996. *A Catalogue of the Gandhāra Sculpture in the British Museum*. 2 vols. British Museum Press, London.
- 小谷仲男 1996. 『ガンダーラ美術とクシャン王朝』(東洋史研究叢刊51) 同朋舎出版(京都大学学術出版会).
- 水野清一編 1968. 『ドゥルマン・テペとラルマ アフガニスタンにおける仏教遺跡の調査 1963 - 1965』京都大学.
- 水野清一編 1969. 『メハサンダ パキスタンにおける仏教寺院址の調査 1962 - 67』京都大学.
- 水野清一編 1971. 『バサーワルとジェラーラーバード・カーブル アフガニスタン東南部における仏教石窟と仏塔の調査 1965』京都大学.
- 水野清一, 樋口隆康編 1978. 『タレリ ガンダーラ仏教寺院址の発掘報告 1963 - 1967』同朋舎出版.
- 西川幸治編 1994. 『ラニガト ガンダーラ仏教遺跡の総合調査 1983 - 1992』第二冊(図版篇)京都大学学術出版会.
- 定方晟 1987. 「カルリ・カネリ刻文の和訳」『東海大学紀要文学部』49: 1-27.
- 定方晟 1990. 「マトゥラー刻文の和訳」I, II 『東海大学紀要文学部』53: 61-83, 54: 97-126.
- 定方晟 1993. 「ナーガールジュナコングダ刻文の和訳」『東海大学紀要文学部』59: 1-25.
- 静谷正雄 1979. 『インド仏教碑銘目録』平楽寺書店.
- 塚本啓祥 1996. 『インド仏教碑銘の研究』I, II, 平楽寺書店.
- 略号 : 大正大蔵経・・・・ 『大正新脩大蔵経』

## Transfer of Merit in Gandharan Buddhism:

An Archaeological and Epigraphic Consideration

Odani, Nakao

The Pot A in the British Library Collection, recently found at Haḍḍa in Afghanistan has a two line inscription. Prof. Richard Salomon investigated this in detail in his work, *Ancient Buddhist Scrolls from Gandhāra*, London 1999, pp.191–199. Pot A, however, has been reconstructed from the surviving fragments at the Library, but there is still a missing piece of the body, which contained part of the inscription of the second line.

Fortunately, I have several pictures of Pot A, photographed before it was broken into pieces, and I have found the missing letters in one of them. I sent the photograph to Prof. R. Salomon with my tentative interpretation, which he kindly reviewed. The missing letters now are to be read as (*sammepratya*) *śae putradhitarāṇa*, meaning “for a proper share on the part of her sons and daughters” in stead of *-śae sarvastavaṇa* (all beings) of the former reconstruction by Prof. Salomon (Salomon 1999: 198, note 14).

I deduce the meaning of the whole inscription of the Pot A to be as follows: Vasavadata, wife of Suhasoma dedicated to the monastery the waterpot, which was to be used as the funeral jar of the dead Reverend Catula(?). His pupil Saṃghapriya conducted his funeral rite and constructed his stupa-tomb, probably cooperating with Vasavadata. She, for her part, obtained merit for doing so and wished to share this merit with her husband, mother, father, sons and daughters as well as with her friends, kinsmen, and blood relatives. Thus we can see that the ritual practice of merit transference were prevalent in Buddhist Gandhāra.

As a rule, the dead were to be cremated in India and Gandhāra in the Buddhist times. After the cremation, the reverend monks would have their stupas constructed and worshipped inside of the monastery. Recently Prof. G. Schopen pointed out that so called small votive stupas surrounding the main stupa in the Buddhist remains all should have been stupa-tombs for the local dead monks (Schopen 1994b: 273–279).

Meanwhile, the funeral jars of ordinary monks were to be buried outside of the monastic complex, though it is not known if they would be annexed with the stupa-tombs or without. The laity also would wish to have their funeral jars buried somewhere in a holy place. Charles Masson once found the large numbers of funeral jars in a mound behind the village, Haḍḍa, near Tapa Kalān. Masson says, “Around the necks [of the funeral jars], in almost all, it is easy to distinguish a green verdigris-coloured patch, proving that coins have been deposited with them.” (Wilson 1841: 113).

I recall the similar funeral custom found in the tombs of Central Asia and Northern Afghanistan. Why did the dead need money? The coins deposited alongside with the dead were intended to pay

## ガンダーラ仏教における廻向儀礼

Charon's fare for when they would be ferried to another world after death. I have introduced a short story from the Buddhist sutras (*Sutralāṃkāra*, No.15, in Huber tr. 1908: 84-90), which alluded to the same custom of Charon's obol in Buddhist India ( Odani 1996: 418-9).

Again, Masson says, "Some of the structures have yielded coins, others none. Those in the former condition I have judged may claim to be considered secular monuments; those in the latter, the more sacred monuments of hierarchs and saints. .... I have conjectured the topes enclosing coins to be due to monarchs." (Wilson 1841:90). The funeral rite of Charon's obol prevailed in Gandhāra also, and it may explain why Charles Masson could collect so many coins inside the stupas at Haḍḍa, and Jelālābād-Kabul.

